

新設授業科目 授業記録

開講科目名：グローバル社会における女性研究者		科目群名【キャリア形成群】
担当教員名：西堀わか子		開講学期・曜日・時限【後期 ・ 土・日 ・ 集中】
第1回授業実施日 【10月22日3,4限】 ① 本時のねらい ② 本時の内容 ③ 本時の成果 ④ 自己評価	授業担当者：原ひろ子 授業テーマ：「国際的に見る女性研究者（人文・社会・理工・医など）の活躍について」 ① 第2次世界大戦後、日本における学术界に女性研究者が漸次参入してきた過程をふりかえり、次代を担う奈良女子大学大学院生に先人の歩みを理解してもらおう。 ② （ア）1945年以前には、女子高等師範学校や女子大学において学問に魅力を感じ、研究者としての第一歩をふみ出した日本女性（津田梅子、中野静ほか）が研究の道を断念して、女子教育に貢献するなどの人生を歩んだ。 （イ）その後1975年の国連国際婦人年を契機として、女性研究者の地位向上について日本学術会議がとりくみ、女性研究者たちも多分野にわたってそれぞれに活躍してきたことを、多様な資料をもとに概観した。しかし日本の研究者の女性比率は依然として低い点を指摘した。 ③ 履修した学生たちは熱心に聴講していたと思う。 ④ 聴講する学生たちの熱意につきうごかされて、多様な資料（『学術の動向』バックナンバー、坂東昌子他編『女性と学問と生活』（勁草書房1981）、原ひろ子作成の年表、その他）について説明するうちに時間が過ぎ、学生たちとの対話の時間がもてなかった点を反省している。	
第2回授業実施日 【10月22日5,6限】 ① 本時のねらい ② 本時の内容 ③ 本時の成果 ④ 自己評価	授業担当者：原ひろ子 授業テーマ：「国際的に見る女性研究者（人文・社会・理工・医など）の活躍について」 ① 日本において、諸分野に関わる女性研究者たちが、どのように多様なキャリア形成の過程を経験してきているかについて男性研究者との対比で論じ、研究者として次世代を担う、奈良女子大学大学院生に、希望と抱負を感じてもらおう。 ② （ア）1982-1984年に行われた塩田庄兵衛・猿橋勝子他による女性研究者をとりまく状況に関する大規模調査（科研費）の成果、および1996-1997年の原ひろ子他による調査（科研費）を資料として、研究者のおかれている状況についての男女比較。 （イ）21世紀初頭の科研費応募に際しての旧姓使用や採択後の妊娠出産による次年度までの研究活動延長の措置などに関して説明。 （ウ）日本学術会議が事務局を担当しているアジア学術会議において、毎年「各国における女性研究者の位置づけやキャリア形成をめぐる諸問題」が論議されるワークショップが開催されていることを紹介。 ③ 近年の文部科学省、総合科学技術会議などによる女性研究者キャリア形成支援の施策の解説は聴講している学生に希望を与えたと思う。 ④ 学生さんとの対話の時間がもてなかったため総合自己評価は70点である。	

<p>第3回授業実施日 【10月22日 7,8限】</p> <p>① 本時のねらい</p> <p>② 本時の内容</p> <p>③ 本時の成果</p> <p>④ 自己評価</p>	<p>授業担当者：鬘月珍 授業テーマ：「女性自然科学者の研究視点」</p> <p>① アメリカの研究者の視点、研究方法、研究評価法についてその一端を紹介することにより日本との相違点を明らかにし、研究環境が急激に変化している日本で、研究者の道を選択しようとしている学生に参考にしてもらいたい。</p> <p>② アメリカ合衆国国立標準技術研究所（NIST）の政府に対する任務、研究状況、国内外の研究機関や企業との連携、海外の若手研究者の積極的な受け入れ、研究や研究者の国際性、女性研究者の研究環境などをNIST発行の資料や自分の体験などに基づき紹介した。</p> <p>③ 自然科学分野の研究者、特に女性研究者の研究視点や研究に対する姿勢などをアメリカと日本を比較しながら紹介することにより学生の理解を深めることができた。</p> <p>④ NISTについてかなり多くの情報を収集し学生に伝達することができた。また、日本で研究生生活をしている研究者の一人として、アメリカで受けた衝撃を学生に伝えることができた。こうした情報提供が、男女共同参画社会で女性研究者としてキャリアを形成していく学生の参考になればよいと考えている。</p>
<p>第4回授業実施日 【10月22日 9,10限】</p> <p>① 本時のねらい</p> <p>② 本時の内容</p> <p>③ 本時の成果</p> <p>④ 自己評価</p>	<p>授業担当者：鬘月珍 授業テーマ：「女性自然科学者の研究視点」</p> <p>① 経済が激しく変革している中国の研究開発状況、人材育成とその活用状況を紹介する。</p> <p>② 中国政府による研究開発への資源投与状況及びその成果、大学における人材育成戦略、海外留学生に対する帰国促進政策とその成果について、中国政府が発表している資料などに基づき紹介した。</p> <p>③ 学生には、成長する経済と実力不足の研究開発が衝突している今の中国と、今後期待される変革を理解してもらえたと思う。</p> <p>④ 政府の教育部、科学部、人事部や中国科学院の人材育成政策の状況は紹介できたが、一見、社会的地位や社会的貢献において男女が比較的平等に見える中国でも、院士など優れた研究者の女性の割合が低い現状を、今後女性研究者がどのように実力を付け努力し改善していくか考察する時間が必要であった。</p>

<p>第5回授業実施日 【10月28日 1,2限】</p> <p>① 本時のねらい</p> <p>② 本時の内容</p> <p>③ 本時の成果</p> <p>④ 自己評価</p>	<p>授業担当者：橋本ヒロ子 授業テーマ：「女性研究者の育成と女子大学の役割；国際的な視点から」</p> <p>① 女性研究者の実態について、特に理系に焦点を当て、国際的な状況を把握したうえで、問題点を見出す。</p> <p>② 国内外における女性研究者の状況について理系を中心に、「国内外の女性科学者の現状および、なぜ女性たちは科学者にならないか、なるための様々な障害」について言及した。</p> <p>③ 女性研究者が当面する課題は領域を問わずに存在するため、学生たちの理解は得られたと思う。特に、日本における女性研究者の状況についての把握はできたようである。今回の講義の内容が今後学生たちが研究者としての道を歩む際の参考にできるだけだけでなく、必要に応じて講義の内容を思い出しながら、キャリアアップができるようになることを期待している。</p> <p>④ 短い質問時間しか取れなかった。学生たちの意見を求め、議論する時間をとるべきであった。</p>
<p>第6回授業実施日 【10月28日 3,4限】</p> <p>① 本時のねらい</p> <p>② 本時の内容</p> <p>③ 本時の成果</p> <p>④ 自己評価</p>	<p>授業担当者：橋本ヒロ子 授業テーマ：「女性研究者の育成と女子大学の役割；国際的な視点から」</p> <p>① 日、米、韓3カ国の代表的な女子大を例に取り、女子大学設立とその発展過程を概観し、女性理系研究者を育成するための女子大学の役割について理解を深める。</p> <p>② まず、日、米、韓3カ国の女子大学の歴史と女子大学数の変遷を概観した。3カ国共に、女子大学は共通的に、自立し、社会で活躍する女性の育成に努めているが、その特徴、女子大学の実績と役割、女子大学のメリット及び女子大学として発展するための課題を述べた。さらに、女子大学が理系研究者を育てるための必然性などについて言及した。いずれの国でも、女子大学は共学校に比べると少人数による中身の濃い教育を実施しているにもかかわらず、志願者を共学校に取られている。女子大学の今後の課題も述べた。</p> <p>③ 受講生が女子大学の大学院生であるので、身近な問題として、理解は得られたと思う。彼女たちが女子大学の意義を感じて、奈良女子大学を再評価し、奈良女子大学の発展のためにも寄与してくれると大きな成果となる。</p> <p>受講生に奈良女子大学への進学理由を聞いてみたところ、女子大学だからという理由はなかった。本講義を機会に、これからの大学院生活を共学校と比較しながら、女子大学の発展のために提案し、貢献してくれることを期待している。</p> <p>④ 上記のような意識付けがある程度できたのではないかと思う。</p>

<p>第7回授業実施日 【10月28日 5,6限】</p> <p>① 本時のねらい</p> <p>② 本時の内容</p> <p>③ 本時の成果</p> <p>④ 自己評価</p>	<p>授業担当者：三輪敦子 授業テーマ：「研究と実践を自由に行き来する～ユニフェム（国連女性開発基金）での経験から」</p> <p>① 日本における学問と社会の関係を批判的に見る目を養い、現実の社会への貢献を射程に入れた研究活動の推進を促す。国際社会での活躍の場の一つである、国際機関での業務と女性への支援を担っている機関について理解する。</p> <p>② 講師自身のプロフィールを簡単に説明した後、日本における学問と社会の関係について、何人かの言葉や記述に基づいて紹介。次に、研究を実践に活かす場の一つとして、国際機関での業務について、特に女性の地位向上のために設置された機関を中心に説明。関心を持つ学生にとっての具体的アドバイスになるように、外務省の国際機関人事センターが出している資料を配付。日本出身の女性としての利点、努力を要する点についても併せて説明。続いて、国際機関の一つであり、講師が勤務経験を有する国連女性開発基金（ユニフェム）について説明。歴史とともに、現在の重点課題について紹介。</p> <p>③ 社会への貢献を視野に入れた研究推進の必要性。「国際社会で働くこと」についての、ある程度、具体的なイメージ。ジェンダーに関連する重要な国際課題にはどのようなものがあるかについての理解。</p> <p>④ 「国際的な活動」には縁がないと感じている学生にとっては、もう少し丁寧な導入が必要であったか。「日本における学問と社会の関係」にももう少し時間を割き、他国の事情の違いとあわせて説明しても良かったかもしれない。</p>
<p>第8回授業実施日 【10月28日 7,8限】</p> <p>① 本時のねらい</p> <p>② 本時の内容</p> <p>③ 本時の成果</p> <p>④ 自己評価</p>	<p>授業担当者：三輪敦子 授業テーマ：「研究と実践を自由に行き来する～ユニフェム（国連女性開発基金）での経験から」</p> <p>① 国際社会におけるジェンダーの重要課題を紹介し、日本が他の国や地域と協力し、解決すべきジェンダーの重要課題に目を開く。研究と実践の世界を自由に往き来しながら、女性の地位向上に力を尽くしている女性たちの姿を伝える。「国際社会」で活動する際に求められる能力、資質、心構えを紹介することにより、どのような力やスキルを身につけることが、国際的にも通用する研究者になることにつながるか、できるだけ具体的に知る。</p> <p>② ユニフェムが、最重要課題の一つとして位置づけている「女性に対する暴力」について、各地域の課題を紹介し現状を伝えるビデオを上映。さらに、ユニフェム時代に出会った、研究と実践を自由に往き来しながら女性の地位向上に力を尽くしていた何人かの女性たちについて紹介。最後に、国際的な場で、実践的に活躍する研究者に求められる能力や心構え、磨いていくべきスキルを説明。その後、質疑応答。</p> <p>③ 女性のエンパワメントにとっての最重要課題である「女性に対する暴力」について国際的な視野で理解。研究と実践の境界を超えながら活躍する女性の存在に目を開く。そのために、どんな力を養う必要があるかについて理解。</p> <p>④ 国際社会での活動を身近に感じてもらえるためには、もう一工夫が必要だったか。国内を拠点にしつつ、日本を超えた活動の場を持っている研究者や実践家を紹介することにも、時間を割いても良かったかもしれない。</p>